

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月25日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520501

研究課題名（和文） 脱焦点化現象についての比較統語論研究

研究課題名（英文） A Comparative Syntactic Study of Defocusing Phenomena

研究代表者

赤羽 仁志 (AKAHANE HITOSHI)

山口大学・人文学部・准教授

研究者番号：60320107

研究成果の概要（和文）：本研究では、英語と他の言語における脱焦点化の諸現象に共通した統語的特性を Chomsky, N. (2000以降)のフェイズ理論の枠組みで捉えることを試みた。フェイズ理論によれば、動詞句( $vP$ )極辺まで移動した要素は、直ぐ外側の節(CP)主要部から作用を受ける。これが談話解釈に影響を及ぼすとすれば、英語以外での短距離かき混ぜされた要素の構造的な位置とその意味解釈についてだけでなく、英語での非焦点要素の生起位置や総称目的語の省略についても妥当な説明が得られる。

研究成果の概要（英文）：In this study, I tried to capture common syntactic properties of various defocusing phenomena in English and other languages within the framework of the Phase Theory (Chomsky, N. (2000 et seq)). Under the Phase Theory, the elements which have moved to the edge of the verb phrase ( $vP$ ) can be affected by the head of the clause (CP) right external to the  $vP$ . Assuming that this causes an important effect on the discourse interpretation of moved elements, we can get a plausible account of the positioning of defocused elements and the omissibility of the generic object NP in English, as well as the structural position and the semantic interpretation of the short-scrambled elements in other languages.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、英語学

キーワード：文法

## 1. 研究開始当初の背景

生成文法の統語研究においては文の形式的側面が強調されてきたこともあり、文(命題)レベルの研究が中心であったが、昨今で

は文(命題)レベルを超えた談話レベルの意味機能に関わる諸側面について統語的アプローチが試みられている。例えば、ハンガリー語のように統語構造と談話機能の間に密

接な関係が見られる言語の分析では、「焦点句(FocusP)」といった機能範疇の仮定がされた (Bródy, M. “Some remarks on the focus field in Hungarian” (*UCL Working Papers in Linguistics* 2, 1990 所収) など)。FocusP の指定部を占める要素に対して談話機能において特定の解釈が付与されるという仮説は、特にハンガリー語に限られたことではなく、様々な言語に当てはめられる。現在、多くの研究者に支持されている Rizzi, L. の理論 (“The fine structure of the left periphery” (Haegeman, L. ed. *Elements of Grammar*; Dordrecht: Kluwer, 1997 所収) ) では、「話題」や「焦点」といった談話機能が統語構造中に組み込まれている。生成文法の現行の枠組み(ミニマリスト・プログラム)でも、Miyagawa, S. の *Why Agree? Why Move?: Unifying Agreement-Based and Discourse Configurational Languages* (Cambridge, MA: MIT Press, 2009) に見られるように、「主語/一致卓立」言語と「話題/焦点卓立」言語との統一的な統語分析が試みられるなど、この方面の研究の重要性が、益々、高まりつつある。また、一方で、焦点解釈がされない要素が焦点位置から外される、言わば「脱焦点化」についても、北ゲルマン諸語やロマンス諸語の目的語移動やかき混ぜの研究で議論がされてきている (Holmberg, A. “Remarks on Holmberg’s generalization” (*Studia Linguistica* 53, 1999 所収) 、Zubizarreta, M. *Prosody, Focus, and Word Order*. (Cambridge, MA: MIT Press, 1998) など)。これらの現象については、「フェイズ」の概念を導入した所謂、フェイズ理論(Chomsky, N. “Minimalist inquiries: the framework” (Martin, R., et al. eds. *Step by Step*, Cambridge, MA: MIT Press, 2000 所収) 以降) から興味深い説明が得られる可能性があつて、Lópes, L. の研究(*A Derivational Syntax for Information Structure* (OUP, 2009))などはそれを示す例と言える。

## 2. 研究の目的

統語構造中に焦点と明確な形で結び付けられた位置を有する言語がある一方、そのような言語と比べ、焦点が統語構造中、比較的自由に分布することを許す言語が存在する。前者の類に入るものとしては、動詞の直前(*vP* 極辺)に焦点位置を持つ前述のハンガリー語などがその代表であろう。後者の類については、構造的に特定の焦点位置を持たない英語などが属すと考えることができよう。一見、後者のような言語は統語構造と談話機能の間に前者のような言語ほど密接な関係が無いように思われる。が、果たして、実際のところはどうかであろうか。そこで、そのよう

な相違が人間言語に唯一的、普遍的とされる統語計算機構から如何に導き出されるのか考察を行うのが本研究の目的である。従来から研究が盛んな焦点化についても検討するが、本研究では情報焦点における「脱焦点化」について注目していきたい。研究対象としては英語を中心としつつも、イタリア語などのロマンス諸語や日本語なども取り上げる。また、ミニマリスト・プログラムの理論的側面に関して、文法を扱う計算機構と談話・語用論に關与する外部機構とのインタフェースのあり方を考察し、焦点要素/脱焦点化要素の生起位置を捉えるため、フェイズという概念の有効性を検討する。

## 3. 研究の方法

基本的な研究方法としては、継続的に関係する書籍・論文等の資料の収集をしながら、文献調査を行う。必要に応じて対象言語の母語話者に調査を実施する。また、学会・研究会などの場を利用して、国内外の研究者との情報交換、情報収集を行う。研究結果は論文としてまとめ、学内の紀要、あるいは、所属学会の機関誌に投稿し、刊行する。

各年度の活動は以下の通りである。

(1) 初年度の 2010 年度については、従前、基礎的な研究に着手していた英語及びロマンス諸語の脱焦点化現象について、更に資料の収集、調査・研究を行った。参加した学会・研究会に関しては、特に、神田外語大学で開催された言語科学研究センター10周年言語学研究会(7/1~7/2)が統語と談話のインタフェース研究に重点を置いた内容で、大いに参考となった。また、生成文法の学会では世界トップレベルの会として認知されている北東地区言語学会第41回大会(米ペンシルベニア大学, 10/22~24)へも参加した。Noam Chomsky 氏の講演もあり、最新の情報を得るまたとない機会となった。他に、関西言語学会第35回大会(京都外国語大学, 6/26~27)、南山大学言語学研究センター第35回コロキウム(2011/2/15)にも参加したが、何れも興味深い研究に接することができた。

(2) 2年目の 2011 年度も、英語の他、ロマンス諸語やバルカンの諸言語における脱焦点化現象について、資料の収集を行いながら調査・研究を継続した。学会・研究会については、特に国外開催のもの(統語・意味インタフェース国際ワークショップ(台湾中央研究院語言學研究所, 6/17~18)、アメリカ言語学会第86回大会(米ポートランド, 2012/1/5~8)、ヨーロッパ生成言語学会第35回大会(独ポツダム大学, 2012/3/27~31))に参加した。世界的に著名な研究者による講

演、発表を多く聴け、生成文法における最近の研究動向を知る機会を得た。国内においても、三重大学で開催されたアジア生成言語学会若手研究者ワークショップ(9/7~8)に参加した。本大会同様、国際的にレベルの高い会であり、大変に有意義であった。

(3) 最終年度の2012年度についても、脱焦点化現象について更に必要な資料の収集を継続しながら、調査・研究を行った。研究会・学会等の機会も利用して情報収集を行ったが、国内では、三重大学において開催されたアジア生成言語学会第9回大会(9/4~6)に出席した。また、ボストンで開催されたアメリカ言語学会第87回大会(2013/1/3~6)にも参加した。何れの会でもミニマリスト・プログラムに関する研究発表を中心に聴いたが、関係する分野だけに留まらず興味深い多くの研究に触れることができた。更に、慶應義塾大学言語文化研究所で開催された講演・討論会「言語獲得理論の現在と今後」(2013/1/26)にも参加し、本研究課題が生成文法の枠組み全体の中でどのような位置付けになるか振り返る機会としてとても有益であった。

#### 4. 研究成果

比較統語論の観点から、様々な言語(英語、イタリア語、スペイン語、ギリシア語、アルバニア語、日本語など)における脱焦点化の諸現象と文派生に課される局所条件との関係について研究を行うことにより、統一的な統語的説明の可能性を探った。特に取り上げた脱焦点化の現象は、「短距離かき混ぜ」、「総称目的語の省略」、「接語重複」、「文末要素の韻律的不可視化」である。これらの現象は表面的には無関係にも見えるが、文派生の基本単位となるフェイズに着目したとき、興味深い共通性が見出された。前提として、フェイズと目されるのは、Chomsky N. (2000 et seq)により、*vP* と *CP* とする。短距離かき混ぜや接語重複を受ける要素は *vP* の極辺に現れると見做せるが、*vP* フェイズ極辺は非焦点解釈が与えられる位置とするならば、脱焦点化要素が顕在化する構造的な位置が記述的に把握される。対照的に、英語では脱焦点化要素が顕在的に *vP* 極辺に現れない。これについては言語による「パラメタ」を仮定し、統語を司る計算機構と発音に掛る外部機構(感覚・運動機構)の相互作用において許される顕在化が為されているのではないかとした。研究を更に深めていく必要があるが、これまで問題とされることが比較的少なかった脱焦点化の現象を通して、人間言語の計算機構とそれを取り巻く外部機構とのインタフェースの解明に繋がる研究ができたのではないかと考える。

年度毎の成果を以下に記す。

(1) 2010年度は、英語とイタリア語、更には日本語における総称解釈の目的語の省略現象について考察を行った。総称解釈の目的語は情報焦点とならず、究極的には脱焦点化の一様式である省略の適用を受ける。同現象は言語により許容度が異なり、イタリア語では許容度が高く英語では低い(Rizzi, L. “Null objects in Italian and the theory of pro,” (*Linguistic Inquiry* 17, 1986 所収))。しかし、英語でも当該の目的語省略が全く不可能という訳ではない。そこで、英語で許容され難いという事実は何によるのか、以下のような説明を与えることができた。まず、イタリア語で観察され英語で観察されない別の脱焦点化の現象として、目的語の短距離かき混ぜに注目する。この現象は、目的語が *CP* 主要部から素性値付与されることによって脱焦点化されるべく、*vP* 極辺へ移動が起こっていると見做せる。素性値付与による脱焦点化と同時に、*vP* 極辺に移動した目的語に時制節 *CP* の主要部から随意に空格が付与され、また、空格は目的語の具現を免除すると仮定してみると、脱焦点化された総称解釈の目的語は随意に省略されることになる。随意的な空格付与はパラメタ化され、英語ではこのパラメタの設定がされない。その結果、目的語が *vP* 極辺に移動した場合そこで顕在化することになるが、これは英語では許されず、コストの高い音声削除が最終手段として適用されることが必要となる。それ故、英語では総称解釈の目的語の省略が許容され難いことが説明される。フェイズ理論を用いたこの分析により、従来、生成文法で仮定されてきた主な空範疇の扱いについても理論的に興味深い示唆が得られた。

以上の内容は、論文としてまとめられ、山口大学紀要『英語と英米文学』45巻に刊行された。

(2) 2011年度は、特にバルカンの諸言語に観察される接語重複を取り上げ、脱焦点化について更に考察を加えた。当該の接語重複では、通常、焦点要素が占める文末位置を非焦点要素が占める。これは、焦点位置を明け渡すように移動が起こる脱焦点化現象としてのスクランブリングとは対照的であり、奇妙に映る。しかし、Sportiche, D. “Clitic constructions” (Zaring, L. and J. Rooryck eds. *Phrase Structure and the Lexicon*, Dordrecht: Kluwer, 1996 所収)などで論じられているように、接語重複にも移動が関与するとした場合、接語の位置が移動先に当たり、この位置に注目すれば、接語重複と短距離スクランブリングとの間に一定の共通性が認められる。特に、脱焦点化のための移動

先が、CP 極辺でなく、所謂、中間領域であるという点が注目に値する。これは一体なぜか。そのような問題について、フェイズ理論を採用し、統語的説明を試みた。フェイズ理論によれば、*vP* フェイズ極辺に位置することにより、CP フェイズ主要部からの探査が可能となる（フェイズ不可侵性条件）。この仮定に基づき、接語重複においては文末に基底生成する目的語が *vP* フェイズ極辺へ移動することにより、CP フェイズ主要部から[-Focus]の素性値を受け、脱焦点化が為されると論じた。このような分析をすることで、短距離スクランプリングと統一的な説明が与えられる。言語によっては接語重複が必ずしも脱焦点化の効果を持たない場合がある。これについてはパラメタによる説明を提案した。また、接語重複が関係しないと思われる言語においても類似の現象が部分的に観察されることを指摘した。具体的には、英語の叙実補文に一種の接語重複が関与しているのではないかと分析している。

以上の内容は、論文としてまとめられ、山口大学紀要『異文化研究』6巻に刊行された。

(3) 2012年度は、既に着手している研究を踏まえつつ、英語における短距離かき混ぜの欠如について考察を加えた。イタリア語やスペイン語では、情報焦点が常に文末に置かれる。基底において文末を非焦点要素が占める場合、焦点が文末に現れるよう、イタリア語やスペイン語では、短距離かき混ぜが適用され調整がされる。情報焦点の位置が文末であることは英語でも多くの場合当てはまるが、それと矛盾するような場合もある。Zubizarreta M. (1998)は、英語では、文末の非焦点要素を韻律的に不可視として無視できるとし、短距離かき混ぜによる調整も不要とした。しかし、英語で、なぜ、このような方策が取れるのかは明らかでない。そこで、このような英語における矛盾について、概略、次のような説明を提案した。まず、「句は、書き出し時に範疇標示されない限り、解釈不可能となる」、「句に指定部要素がある場合、指定部要素か句の主要部が句から抽出されなければ、その句は範疇標示されない」という Chomsky N. ( "Problems of projection" (*Lingua* 130, 2013所収) ) の主張を受け入れる。ロマンス語では *vP* から主要部 *v* が抽出されるため、その指定部に非焦点要素が短距離かき混ぜされても *vP* の標示は可能である。一方、英語は *vP* から *v* が抽出されないため、指定部に短距離かき混ぜされると *vP* の標示ができない。この場合、指定部の位置を占めた要素は音韻的にも意味的にも脱焦点化を受けるが、それと同時に「第2」の補部として再分析がされるとすることにより、*vP* の標示が可能と

なる。英語では補部が主要部に後続するため、結果として、非焦点要素が文末に生起することが説明される。

以上の内容は、今後、然るべき場所で発表したい。

期間内に着手できなかった点や議論できずに残された点については、更に十分時間を掛けて追究していきたいと考えている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① 赤羽仁志、接語重複と脱焦点化について、山口大学『英語と英米文学』、査読無、45巻、2012、1-37  
<http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/yunoca/handle/C080045000003>

② 赤羽仁志、A phase-theoretic analysis of object omission、山口大学『異文化研究』、査読無、6巻、2010、25-48

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

赤羽 仁志 (AKAHANE HITOSHI)  
山口大学・人文学部・准教授  
研究者番号： 60320107

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：